

毛沢東と巨大水利建築

——1950年代の官庁ダムと十三陵ダムを中心に

島田美和

はじめに	183
I 毛沢東の都市構想と建国直後の水利政策	185
II 官庁ダム建設と三反運動	189
III 巨大水利建築と国家指導者像の形成	193
IV 十三陵ダムと国家指導者像の転換	198
おわりに	204

はじめに

1949年1月31日、中国共産党は北京で国民党軍を指揮する傅作義との交渉の結果、国民党軍を市内から撤退させ北京に無血入城した。同年9月27日、中国人民政治協商会議第一回全体会議の「中華人民共和国国都、紀念、国家、国旗に関する決議」⁽¹⁾によって、北平市は北京市と改称され中華人民共和国の首都に定められた。しかし、半乾燥地に位置する北京を新国家の首都として改造するには、水資源の確保と河川管理の問題を解決する必要があった。

北京の水利に関しては、長らく永定河の治水が問題であった。北京の西から南へ流れ、幾度も氾濫を繰り返した永定河に対しては、歴代の王朝や政府によって洪水対策やダム建設が試みられてきた。中国共産党は1954年に都市のインフラ・ストラクチャー⁽²⁾（以下、インフラと略す）整備として、永定河の洪水対策および貯水を目的とした官庁ダム（堤高45 m、堤頂長290 m、総貯水量22億 m³）を完成させた⁽³⁾。これは、人民共和国建国後初の大型ダムとなった。さらに、大躍進期に入ると北京の北部山間地域では、大衆動員による水利建設運動の一環として、1958年1月より十三陵ダム（堤高29 m、堤頂長627 m、総貯水量6,000万 m³）⁽⁴⁾の建設が始まった。その後1960年には北京の水源としては最大の密雲

ダム（堤高66 m、堤頂長960 m、総貯水量43.75億 m³）⁽⁵⁾を始めとする数十基のダムが次々と建設された⁽⁶⁾。

人民共和国建国初期、毛沢東は北京周辺の治水事業だけではなく、淮河や長江そして黄河など全国的な治水事業と大型水利施設の建設に取りかかった。そこでは、第一に洪水防止が掲げられ、淮河では毛沢東の「偉大的治淮工程（偉大な淮河治水事業）」という題詞のもと大衆動員がなされ、1953年に全長697.75 mの鉄筋コンクリートの三河閘など大型水門が建設された⁽⁷⁾。長江では支流の荊江で、武漢と江漢平原への洪水防止のため、毛沢東が1952年に「為広大人民的利益、争取荊江分洪工程的勝利！（人民の利益のために、荊江分洪事業での勝利を勝ち取ろう）」と題詞を示して⁽⁸⁾工事を推進させ、大型堤防と全長1,054 mの巨大水門である北門を完成させた⁽⁹⁾。黄河では、1952年10月から11月に毛沢東は自ら黄河下流の各地（済南、蘭考県、開封、鄭州等）を視察し、河南での農業灌漑を推進した⁽¹⁰⁾。

従来の人民共和国期における水利事業に関する研究は、経済史や政治史の側面から、三门峡ダムや三峡ダムなどを例にその水利政策を分析した⁽¹¹⁾。また、環境史の側面からは、Pietz（2015）が毛沢東の黄河治水事業を取り上げ、中国の伝統的な国家統治者像が毛沢東の水利政策に影響を与え、その国家指導者像の醸成に寄与したことを指摘する⁽¹²⁾。

他方、ダム建設は都市インフラにおける巨大建築とみなすことができるため、物的なモニュメント性をも持ち合わせる⁽¹³⁾。モニュメント（「記念建造物」あるいは「歴史的建築」）など巨大建築と指導者の関係について、スジック（2007）は「建築は個人のエゴを景観や都市に、それどころか国家の規模にまで膨れ上がらせる手段」であると定義する⁽¹⁴⁾。その上で、毛沢東と巨大建築に関する例として、1958年の人民英雄記念碑の設置、1959年の建国十周年における天安門広場の拡張と人民大会堂や革命歴史博物館など十大建築の建設を挙げる⁽¹⁵⁾。このような毛沢東による人民共和国期の首都建設と建築物の関係性については、毛沢東や周恩来など国家領袖と梁思成など建築家との間での都市計画をめぐる議論を扱った王軍（2003）や徐蘇斌（2009）の研究があるが、そこでは都市建築が考察対象とされ、水利建築についての言及はない⁽¹⁶⁾。

では、毛沢東にとって北京及びその周辺に巨大水利建築を建設することはいかなる意味を持ったのだろうか。例えば、マックファーカー（1983）は、毛沢東が十三陵ダムで労働する写真に関して、延安スタイルの動員、すなわち大衆と苦勞を共にすることを復活させる合図であり、肉体労働を重視することの象徴であると指摘する⁽¹⁷⁾。ただし、なぜ毛沢東の労働が北京の水利建築の建設の場で行われたのか、建国初期からの中国共産党の北京の都市建設と水利事業の文脈の中での十分な考察はなされていない。

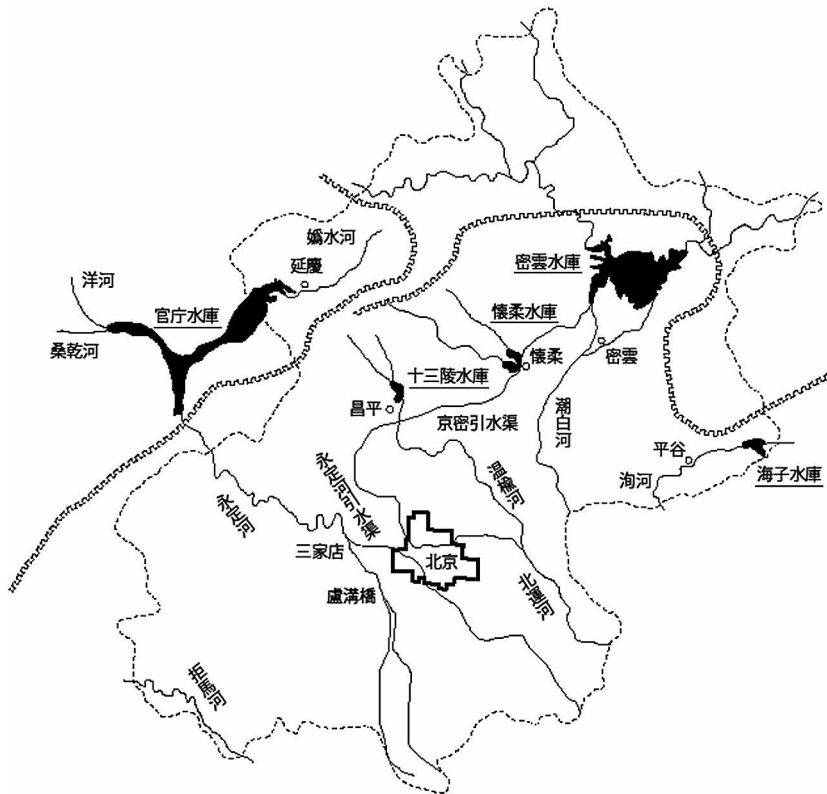
本稿では、建国初期から朝鮮戦争や三反運動を背景に建設された官庁ダムと大躍進期に

最も早く工事が開始された十三陵ダムの建設をめぐる言説を取り上げ⁽¹⁸⁾、1950年代における巨大水利建築の建設から毛沢東の首都建設と水利事業が持つ政治的意味を明らかにする。加えて、『人民日報』や当時出版されたダム建設に関する書籍や写真を用いて、国家指導者としての毛沢東像の醸成と変容についても検討していく。

I 毛沢東の都市構想と建国直後の水利政策

北京周辺の主要な河川には、永定河、潮白河、北運河、拒馬河の海河水系と洵河を擁する薊運河水系がある⁽¹⁹⁾。このうち永定河は桑乾河と洋河が河北省涿鹿県（現在は張家口市懷來県）朱官屯で合流した後の名前であり、官庁村付近で媯水河が流れ込み、そこから官庁山峡に入り北京西北の三家店で山峡を出て、河北平原に流れ込む。その後、盧溝橋を過ぎ、天津付近の屈家店から北運河に入り海河となり、天津を経て渤海に注いだ⁽²⁰⁾。

北京の降水は夏の終わりから秋の初めにその7割が集中する。永定河は上流域が黄土高



北京河川図：北京水利志編輯委員会編『北京水利志稿』（第1巻、1987年）より作成

原と丘陵地にあたり、雨で削られ大量の泥沙が河に流れこみ河床が高くなるため、流れが固定しにくかった⁽²¹⁾。そこで明代には首都防衛のために、石景山から盧溝橋に至る部分の北京に面する東岸にのみ強固な堤防が築かれた。清代には、1698年に本格的な永定河治水事業が行われ、その際康熙帝によって永定河と名付けられる。その後、雍正から乾隆期にかけては、治水官製の整備や河道のつけかえなどの洪水対策が取られた⁽²²⁾。

北京政府期には、西洋列強からの要望で天津租界や鉄道を洪水から守るため、順直水利委員会が主に首都付近及び下流を対象とする永定河治水計画を議論するが、上流の官庁付近でのダム建設についても提案していた⁽²³⁾。そして国民政府期では、順直水利委員会を接收した華北水利委員会のもと、1929年に定められた「永定河治本計画大綱」の中で上流でのダム計画が提出された。そこで、泥土の堆積による河床の上昇を防ぎ抜本的な洪水防止を図るため、チャハル省懐来県官庁村にダムを建設することが決定されたのである⁽²⁴⁾。

しかし、この官庁ダム建設構想は、日中戦争により頓挫する。また、内戦期においても華北水利委員会を改名した華北水利工程局の下に永定河官庁ダム工程処が設立されたが、工事開始には至らなかった。人民共和国建国以降は、中央人民政府水利部（以下、「水利部」と略す）が華北水利工程局及び永定河官庁ダム工程処を接收し、官庁ダム建設事業を再開した⁽²⁵⁾。北京政府期に提案され、国民政府期に具体化された官庁ダム建設計画は、人民共和国期に至り1949年10月に発足した水利部華北水利工程局のもとで終に本格的な工事の着工がなされた⁽²⁶⁾。

その背景には建国直後の北京都市建設の問題が関わっていた。当時の北京の水利をめぐっては、まずは首都の復興のために北京市街の水利を復旧させる必要があった⁽²⁷⁾。しかし同時に、人民共和国の新たな首都として北京を建設するために、洪水からの首都防衛と水資源確保の必要性から官庁ダム建設は推進すべき事業であった。この都市建設には毛沢東の都市構想が深く関わるため、ここで建国前後の毛沢東の都市観をみてみたい。毛沢東は1949年3月5日に河北省平山県西柏坡村で開かれた「中国共産党第7期中央委員会第2回総会（中共7期2中全会）」での報告の中で都市と農村の関係について以下のように述べた。

1927年から今まで我々の活動の重点は農村におかれた。我々は農村で力を結集し、農村によって都市を包囲し、そのあとで都市を手に入れた。このような活動方式をとる時期はもう終わった。これからは、都市から農村への時期、しかも都市が農村を指導する時期がはじまる。党の活動の重点は農村から都市に移される。……だが党と軍隊の活動の重点は都市に置かなければならず、非常に大きな努力をはらって都市の管理、都市の建設を習得しなければならない⁽²⁸⁾。

ここで毛沢東は、都市建設と都市管理の重要性に言及し、党の工作の重点をこれまでの農村から都市へと転換させることを指示した。さらに毛沢東は都市の役割について以下のように述べる。

同時に我々は建設事業に着手し、少しずつ都市の管理を習得し、都市の生産事業を回復し発展させなければならない。生産を回復し発展させる問題については、第一が国営工業の生産、第二が私営工業の生産、第三が手工業の生産であることを明確にしなければならない。……都市の生産を回復し発展させ、消費都市を生産都市に変えた時だけ、人民の政権は強固なものになる⁽²⁹⁾。

毛沢東は、都市を「消費都市」から工業化した「生産都市」へ改造することを提起したのである⁽³⁰⁾。

では、毛沢東の指す「消費都市」とは具体的にどの都市を指し、いかなる特徴を持つものであったのだろうか。同年3月17日付の『人民日報』において「消費都市」について以下のように補足される。

旧中国の半封建、半植民地国家において、統治階級が居住する大都市は（北平のように）、おおかた消費都市である。一部の都市は、早くから近代工業を擁するも（天津のように）、消費都市の性質を持つ。これらの存在と繁栄は、労働者から搾取するほか農村からの搾取で成り立っている。……我々が大都市に入城した後、こうした現象が続くことを決して許さない。また、こうした現象を必ず撲滅し、計画的かつ段取りよく速やかに（筆者注：都市の）生産を回復し発展しなければならない⁽³¹⁾。

ここでは、毛沢東が述べた「消費都市」について「統治階級が居住する大都市」と説明され、その代表例として「北平」が挙げられている。この毛沢東の方針は北平市の市政へも影響がみられる。1949年4月16日の中共北平市委員会の「北平市の当面の中心工作に関する決定」として発表された彭真の起草による「生産の回復と発展が都市工作の中心任務である」の文中では、以下のようにある。

生産の回復と発展においては、毛主席の指示どおりに、公私関係に配慮し、労使関係、都市と農村関係や内外関係をうまく処理し、まさに「四面八方」政策を適切にやり遂げなければならない。生産の回復と改造そして発展こそが、北平の党政と軍民の

目下の中心任務であり、その他の任務はこの中心任務のために遂行され、この中心任務に従属するものである⁽³²⁾。

ここでは、北平を「生産都市」へと改造することが、北平市政の中心任務であると位置づけられた。この方針は、北平市が首都に制定され北京市へと改称された後も継続される。1950年1月、北京市長の聶榮臻は北京解放一周年を記念してラジオ演説を行い、以下のように表明した。

我々の任務は、生産と建設のための発展の道筋から障害を取り除くために、あらゆる反動的な残存勢力を粉碎し、強固な人民民主独裁を打ち立てることである。それによって、北京を消費都市から生産都市に造り変え、人民の文教教育事業および市政建設の計画を実現し、人民の福利を保護し発展させるのである⁽³³⁾。

このように毛沢東の「消費都市」を「生産都市」へ改造する都市構想は、北京市の都市政策にも反映され、これは毛沢東が北京を工業都市へと改造することを志向していたことを物語る⁽³⁴⁾。

そしてこうした毛沢東の都市構想の転換は、北京の水利政策においても反映され、これまで重点が置かれてきた洪水防止などの治水に加え、工業都市の建設のための水資源の確保が新たに重視されることとなった。これを裏付けるように、1949年11月11日に華北水利工程処の官庁ダム工程処が提出した『官庁ダム工程処永定河の整理及び流域開発計画草案提綱』（以下『提綱』と略す。）では、官庁ダムの建設意義について、第一に永定河の洪水防止を挙げるが、第二には発電や灌漑のための蓄水利用に言及し、計画完成後における北京の工業用水の供給についても説明がなされている⁽³⁵⁾。

この『提綱』は、1949年11月8日から18日にかけて水利部が開催した各解放区水利聯席会議において提出され、官庁ダムの建設もそこで正式に承認された。この会議では、建国後初めて各地の水利専門家が召集され、人民共和国の水利方針と1950年度の水利事業が決定された⁽³⁶⁾。開会式では、各解放区の水利専門家、教授ら70人ほどが集まり、清華大学工学院院長施嘉煬⁽³⁷⁾らの講演も行われた⁽³⁸⁾。また、主席団として傅作義、李葆華⁽³⁹⁾、邢肇棠⁽⁴⁰⁾、劉寵光、徐覺非⁽⁴¹⁾、魏兆麟、王化雲⁽⁴²⁾、丁仲文、徐正⁽⁴³⁾、成潤、張含英⁽⁴⁴⁾、須愷⁽⁴⁵⁾が選出された⁽⁴⁶⁾。この中には、水利部部長の傅作義や副部長の李葆華、邢肇棠のようにこれまで全く水利事業に携わっていない軍人や中国共産党幹部らとともに、王化雲にみられる共産党辺区での水利事業経験者の名前もみられる。他方、徐正、張含英、須愷のように

国民党政権で活躍した水利専門家も選出されている⁽⁴⁷⁾。ここから、建国直後の人民共和国の水利政策には国民党政権期の政策や技術の継承も企図されていたと考えられよう。

会議の開幕式では、傅作義がまず「我々の水利事業はまさにすべての生産建設の要の一つであり、共同綱領の生産に関わる第34条、第35条、第36条はみな水利の重要性について提起している」⁽⁴⁸⁾と、人民共和国の水利政策と共同綱領との関わりについて説明を行った⁽⁴⁹⁾。具体的には、共同綱領の第34条、第35条、第36条と関係のある水利政策、例えば農業面における洪水、干ばつ防止、灌漑用水路の開削や工業および交通面における河道の浚渫、港湾修築、水力発電が挙げられた⁽⁵⁰⁾。加えて傅作義は毛沢東による中国の革命闘争と農民との繋がりを示し、農民が農業の生産発展及び水害の防止と水利の開発を要求しているとし、水利政策を毛沢東思想の中に位置づけた⁽⁵¹⁾。

次に傅作義は、毛沢東の名を中国史上における治水に貢献した人物とともに挙げた。それらは、黄河治水における禹、戦国時代に都江堰を建設した李冰、清末のオールドス北部で大規模灌漑事業を行った大地主の王同春⁽⁵²⁾、そして近代水利の祖として国民政府期に閩中の灌漑を行った技術官僚の李儀祉⁽⁵³⁾である⁽⁵⁴⁾。1949年末段階の水利部における傅作義の発言には、治水事業を毛沢東の革命闘争と重ね合わせ、毛沢東を中国の治水事業の歴史的人物と同等に評価する表現がみられた。他方で傅作義は、後に批判対象となる地主や技術官僚についても言及しており、こうした発言からは建国直後の人民共和国の水利政策における多様性がみてとれる。

この他にも会議では、水利部副部長である李葆華が、水利建設の当面の基本方針を「洪水を防止し水利を建設し、大いに生産を発展させる目的を達成すること」と定め、水利政策において洪水防止と生産性の重視を指示した⁽⁵⁵⁾。加えて、河川事業の指揮系統を統一するため、水利行政の統合が課題とされ、官庁ダムを計画する華北水利工程局は水利部の指導下に編入された⁽⁵⁵⁾。このように水利行政の再編が中国共産党のもとで進められるも、国民政府期から人民共和国期への過渡期である建国直後には、水利部の政策や機構そして官庁ダム計画において、国民政府期の人材や水利行政の影響が残されていたのである。

II 官庁ダム建設と三反運動

官庁ダム建設は、1949年11月の各解放区水利聯席会議において承認され、1951年には工事の着工と永定河下流の河床整備が予定された⁽⁵⁷⁾。しかし、1951年2月14日から16日にかけての中央政治局拡大会議において、朝鮮戦争の長期化を見込んで計画経済建設が決定されたこと⁽⁵⁸⁾、官庁ダム建設計画へも影響が及ぼされることになる。毛沢東は「三年準

備、十年計画経済建設」として、1953年から計画経済建設を開始することを決定した⁽⁵⁹⁾。さらに、10月には、中央政治局拡大会議で朝鮮戦争と財政が議論され、その軍事費捻出と工業化達成の必要から、11月以降各地で増産と節約の運動を展開することが取り決められる。そして12月1日には、中共中央が「人員の精鋭化と行政の簡素化、増産節約、汚職反対、浪費反対と官僚主義反対に関する決定」⁽⁶⁰⁾を正式に全国へ通知し、増産節約運動の円滑化を図った⁽⁶¹⁾。この中国共産党に指導される三反運動（汚職、浪費、官僚主義の取り締まり）は、まさに膨大な予算の下に水利事業を展開する水利部の各地方機関および各事業においても例外なく繰り広げられた。

まずは、水利部各機関における汚職の摘発状況についてみる。水利部党組による三反運動では、水利部およびその関連機関における全職員4万6,185人のうち、汚職者1万5,000人をあげ、これが全職員の約3割を占めると報告された。

ここで注意すべきは、実際に汚職を行った者だけでなく、「汚職する機会が比較的多い者」まで摘発されている点である。本部と各地方支部の汚職の割合がほぼ3割前後であることから、数値目標の下での恣意的な汚職の摘発が想定される。摘発内容については、「計画が周到でない」、「工事が不適切」、「検査が厳しくない」、「機械や資材の保管が不適當」などが挙げられる。水利部党組は、これら汚職の原因を官僚主義による指導にあるとし、三反運動推進のため、以下の改組案を打ち出した。第一には、各機関における党の指導体制の組織化、すなわち「党の指導精神に責任を持ちこれを保障する」首長によって臨時党組を組織し運動を指導することである。また、行政面でも、増産節約運動委員会を設けその下に弁公室を設置して運動の事務機関とすることが決められ、党の指導強化と運動推進のための組織化が挙げられた。第二に、運動の規模については「行政単位を小組に分け」、「大衆を動員するためには小組は出来るだけ大きく、各小組で最小20人とし、検査中は必要に応じて合わせて40、50人でも良い」と定め、運動時期を12月5日から1月6日までの

表1

本部及び 直属機関	本部	華北水利 工程局	黄河水利 委員会	長江水利 委員会	治淮 委員会	珠江水利 工程総局	南京水利 実験処
汚職者（人）	164	639	2,447	1,323	9,116	313	100
割合（％）	32.8	28.9	29.8	29.4	31.0	29.1	30.0
職員総数（人）	501	2,175	8,197	4,500	29,405	1,075	332

1950年度水利部各機関における汚職者の摘発数⁽¹⁾（1950年の報告書をもとに報告された人数から作成）

⁽¹⁾「中央轉發中央財政部、水利部、輕工業部及人民銀行各党組關於反貧汚、反浪費、反官僚主義的報告（1951年12月）」、宋永毅主編『中国五十年代中期的政治運動資料庫：從土地改革到公私合營（1949-1956）』ハーバード大学フェアバンク中国研究センター、2014年。

1か月間とした。第三には、水利部党組による地方機関への指導と検査の実施である。すなわち、「(筆者注：各支部の) 地域が散らばっているが、各所属単位と地方水利機関においても、地方党政機関の責任と指導の下に運動を行う」とし、各地方水利事業を党の指導下に置く。必要時には水利部党組が検査組を組織し、重要地域には手分けして検査を行うと定められた⁽⁶²⁾。要するに、水利部党組は、三反運動と増産節約運動を通して、組織の簡素化を図るだけでなく、水利部の各単位および各地方機関に対して、党の指示を浸透させるよう組織化を図ったのである。

こうした水利部党組の三反運動推進による各地方水利機関の組織化は、官庁ダム建設および事業にいかなる影響を与えたのだろうか。『人民日報』の報道から官庁ダム建設現場における三反運動の展開過程を検討したい。1952年3月27日の『人民日報』では、1951年12月、水利部部長傅作義と副部長李葆華及び華北水利工程総局局長成潤が、官庁ダム建設現場へ調査に来たことを紹介し、工事の遅れと幹部の責任を以下のように指摘している。

工事が始まったばかりのため計画が準備不足で、また準備と建設が同時進行され、さらに任務が多いのに天候も寒く日が短いため、工事開始後は短期的に混乱し、人材も物資も浪費がみられた。……ある指導幹部は、大衆運動を利用した作業方法が出来ず、一部の技術者はただ単に技術的観点しか持たず、建設現場の建設労働者への教育と生活に適した手配を無視しているため、建設現場へ来た多くの労働者は不安を抱き事業に影響が出ている。……幹部と技術者は計画的、組織的に広く労働大衆に頼るべきであることを明確に認識した。

このように工事の推進について、建設労働者の意見に依拠するよう求めた。さらに「まず政治指導を強め、各々の工程すべてに政治工作組を設置することにより、建設労働者の実際問題を解決し、他方で建設労働者に愛国主義と集団主義の教育を積極的に行う」とし、政治工作組を通して水利部党組による三反運動の推進と工事への管理が強められたのである⁽⁶³⁾。

さらに『人民日報』では幹部や技術者への批判が激しくなっていく。当時、官庁ダム工程局（以下、工程局と略す）の局長を務めていたのは水利専門家の高鏡瑩であった。高鏡瑩は、アメリカのミシガン大学で測地測量学の修士号を修め、国民政府期に華北水利委員会の永定河官庁ダム工程処副処長などを歴任した人物である。人民共和国成立後も華北水利工程局総工程師として、海河および海河水系に連なる永定河の治水に関する技術面での責任を担うと同時に、工程局の局長として官庁ダム建設の総指揮を執っていた⁽⁶⁴⁾。しか

し、1953年2月5日の『人民日報』で、官庁ダム建設の工事の遅れは国家財政の浪費にあたり、「工程局は工事において建設労働者の安全を重視していない。昨年一年間の統計によると、死亡傷害事故は89件、建設労働者の死亡は11人、負傷者は124人である」として工程局幹部への批判が展開された。さらにその原因を以下のように列挙した。それらは第一に工程局の組織重複と指導の不統一、第二に工程局幹部の持つ深刻な保守思想とソ連の技術を採用せず盲目的に工事を実施していること、第三に建設労働者の組織と労働力が適切に使用されず、思想教育の工作を劣り、労働者の作業効率が低いことである⁽⁶⁵⁾。第二の理由にある深刻な保守思想とソ連の技術の不採用については、局長である高鏡瑩の国民政府期の経験とアメリカ留学によって得られた土木技術が批判されたと考えられる。

そして3月13日の『人民日報』では、官庁ダムの建設労働者たちによる三反運動の展開と幹部批判の様子が報じられた。

現在上から下まで批判検査運動が展開されている。建設事業の指導機関と幹部の官僚主義における作風が検査され、工事の施工における遅れと浪費現象について正された。加えて、工事の進展を早め今年の（筆者注：夏の）増水前に官庁ダムに洪水の水を貯めることが約束された。

批判検査運動の理由は、1953年1月の建設労働者代表大会で労働者の代表達から工程局へ507件もの批判が届き、2月5日『北京日報』⁽⁶⁶⁾で建設事業の進展が遅く浪費の多い深刻な状況が報じられたことであった⁽⁶⁷⁾。

最終的に工程局の幹部批判は、局長人事の交代へと発展していった。4月8日の『人民日報』では、その理由を以下のように述べる。「今年の春、官庁ダムの建設現場で反官僚主義運動が展開され、多くの建設労働者によって事業の遅延と浪費が暴かれたことで、工程局は改善を決意した。」そして、3月中旬に、水利部は水利部辦公庁副主任郝執齋⁽⁶⁸⁾を新しい工程局局長として、中共河北省委員会は省委員会委員李子光⁽⁶⁹⁾を派遣し、官庁ダム建設現場を検査したと報じている。

現在、工程局の指導の下、各科、各室、各施工単位はみな責任制を取り始めた。各工程単位が所有していた倉庫と財務は、すべて工程局の指導の下に統一された。（筆者注：工程局は）効果的指揮を取るようになり、技術者から煩雑な行政事務を取り去ったことで、指導と施工を組織することに集中できるだろう⁽⁷⁰⁾。

この報道から、郝執齋が新たに工程局局長に就任し、局長であった高鏡瑩は工事全体に対する指揮権を失い、技術面のみを指導する技師長になったと推察される⁽⁷¹⁾。4月以降、官庁ダムの工事の指揮権が水利専門家から党幹部へと交替し、工事への指揮と動員が強化されたことによって、その後わずか3か月でダムの外壁部分が完成された。それについて1953年7月1日の『人民日報』では以下のように報じている。

この春始まった大規模施工は、共産党の正確な指導と4万人の労働者の積極性と創造性が十分に発揮され、加えて全国各地の支援とソ連の水利専門家の助けにより、3か月の厳しい工事を経て夏の増水前にダム堤防工事計画を完成させた。

このように、官庁ダム建設の功労と称賛は、国民政府期から官庁ダム建設に従事し、アメリカでの留学経験を持つ水利専門家に対してではなく、中国共産党と建設労働者およびソ連の技術に与えられたのである⁽⁷²⁾。

Ⅲ 巨大水利建築と国家指導者像の形成

人民共和国初の大規模水利建築である官庁ダムは、毛沢東による三反運動の推進と社会主義化へのかじ取りの中、中国共産党による指揮の強化と大量の建設労働者の動員により早期に完成された。1953年に中央新聞記録電影片庁によって制作された官庁ダム工事記録映像（彩色版フィルム）の宣伝文では、官庁ダムは以下のように描写される。

1953年の五一節に労働者が、党の呼びかけに応じて永定河下流の災害を防ぐため、夏までにダムの堤体を急ぎ修築した。1953年8月に大洪水が起きるも、すでに完成したダムで堰き止められ、下流の人々の生命や財産が助かり、洪水は防がれた。今後、洪水防止だけでなく、永定河の水は多くの電力を生み出し、農地の灌漑、北京の公園そして工場にも利用され、首都はより美しく繁栄する。永定河の兩岸の山地には風光明媚な郷が築かれる。

ここでは、官庁ダムの洪水防止の役割、その建設のための中国共産党とダム建設労働者との強い結びつきが宣伝される。加えて、官庁ダムが水力発電、農業灌漑、都市水利など複合的目的を持つ利水施設として首都北京の建設に貢献することも提唱されている⁽⁷³⁾。ではこの首都防衛の治水と首都建設の象徴としての巨大水利建築である官庁ダムの建設に、

毛沢東は国家指導者としてどのように表れるのだろうか。

まず、1953年7月2日の『人民日報』は、官庁ダム建設の4万人の労働者から毛沢東へ、工事完成と毛沢東及びソ連技術者への感謝の辞が述べられた内容の手紙が送られたことを報じた⁽⁷⁴⁾。ここでは、大型水利事業の指導者としての毛沢東と社会主義国であるソ連への水利技術への賛辞が述べられる。同時に、毛沢東と建設労働者との手紙のやり取りから、毛沢東と建設労働者との直接的関係性が強調されている。さらに、こうした毛沢東と建設労働者との関係を表現したものが、毛沢東の官庁ダム視察時の写真である。

1954年4月11日、毛沢東は完成目前の官庁ダム建設現場を視察している⁽⁷⁶⁾。この時の様子は、紅牆攝影師（中南海に居住する毛沢東の専属カメラマン）と呼ばれる女性カメラマンの侯波⁽⁷⁷⁾によって1枚の写真（1954年「毛沢東視察官庁水庫」）に残されている。ここで注目すべき点がある。第一に、ダムの巨大さは確認できるものの、まだ水がはられておらず、完成前の状態で撮影されている点である。つまり、完成後の巨大建築としての官庁ダムと毛沢東という構図ではなく、ダムの建設中にダム建設関係者との撮影を重視していることが分かる。第二に、毛沢東と現場の人々が横一列にならび、その中央少し前方に一



写真1 「毛主席の官庁ダム視察」⁽⁷⁵⁾

人で人々を指導するような位置に毛沢東が立つという構図上の特徴である。これは、水利事業の指導者である毛沢東を一人だけ少し前に立たせ、その存在を浮かび上がらせつつ、少し後ろに官庁ダム建設関係者を配置し、巨大水利建築の建設を毛沢東の指揮のもと大衆が建設するという関係を強調した構図となっているのである。このように、写真からも見てとれるように、毛沢東の関心は巨大建築の完成という伝統王朝のような権威や権力の誇示ではなく、巨大建築を建設する大衆を指導する国家指導者像の醸成に向けられている。毛沢東にとって完成前の工事現場でのこの写真の撮影が、不可欠であったことは間違いない。

さらに、1954年5月13日午後に開催された官庁ダムの完成式典には毛沢東は参加していない。式典へは水利部部長の傅作義を筆頭に華北行政委員会委員の何基澧、中共河北省委員会書記兼河北省人民政府主席の林鉄、天津市、張家口専区、保定専区、通県専区、永定河上流下流地域の中共党委員及び人民政府の代表、懐来県、延慶県の党政幹部と代表が出席している。ただしここで毛沢東は、予め錦旗に題詞「慶祝官庁水庫工程勝利完成（官庁ダム事業の完成勝利を祝う）」を書き、当日傅作義を通して建設者の代表に授与させている⁽⁷⁸⁾。官庁ダムに毛沢東の題詞が授けられたことは、この官庁ダム建設が国家指導者によって記念され、巨大建築としての官庁ダムが人民共和国の記念碑としての役割を果たすことを意味する。毛沢東は、官庁ダム建設事業を通して治水事業を指導し、首都北京の建設を行う国家指導者像を大衆に醸成したのである。

次に、官庁ダムの対外的効果について検討する。朝鮮戦争の休戦後、中国外交においては、西側諸国との関係改善と信頼関係の構築が急務であった。官庁ダムは、長城近くに位置し、北京に外国使節団が来た際に、長城と共に見学できる建国後初の巨大水利建築であった。1953年10月3日にポーランド文化代表団、スロバキア文化代表団、ベトナム中国友好協会代表団、中仏友好協会代表団、ドイツ民主共和国科学文化考察団、イギリス電気労働組合代表団などが視察に訪れた。日本からも左派系ロシア文学者の米川正夫⁽⁷⁹⁾や社会運動家大山郁夫の秘書であった淡徳三郎⁽⁸⁰⁾が官庁ダムの建設現場へ訪れている⁽⁸¹⁾。訪問団はおもに東側陣営の国々で構成されていたが、西側諸国の左派に属する人々も含まれたのである⁽⁸²⁾。

そこで本稿では、視察団の日本人に焦点をあて、左派ロシア文学者米川正夫と自由党議員山口喜久一郎⁽⁸³⁾の官庁ダムに対する感想をそれぞれみてみたい。米川は1953年5月からヨーロッパとソヴィエトを訪問したが、ヨーロッパ滞在中にそのまま中国から国慶節に呼ばれ、国賓として9月28日に北京に到着し、10月1日の国慶節の祝賀行事に参加した。その後米川が10月3日に官庁ダム建築現場と長城を見学した際の感想は以下のとおりである。

中国は毛沢東の解放後、いくつかの大きな治水工事を完成したが、永定河のダムもその一つである。……水を防ぐにはただ堤によるほかなかつた。ところが、洪水の度に堤が決壊するので、下流の農民の蒙る災厄は莫大なものであり、従ってこの川の治水工事は、国家的な意義を有するものなのである。……私も「胡沙ふく風蕭條」といったやうな言葉で形容されてゐたこの地方が、美しい肥沃の土地となつていくのを、わがことのやうに嬉しく思ひ、柯さんに代表された中国大衆の将来を、心ひそかに祝福した。……私は八達嶺の城壁の上に立って、……一方、このモニュメンタルな大工築を完成した中国民族に対して、尊敬に似た気持ちをいだかずにもられなかつた。

米川は、毛沢東による官庁ダム建設の「国家的な意義」を取り上げ、また長城の建築については中国の人々に対して畏敬の念を述べた⁽⁸⁴⁾。中国共産党は、海外の要人に前近代の巨大モニュメントである八達嶺の長城と官庁ダムを同時に見学させることで、かつての古代王朝と人民共和国の印象を重ね合わせ、建国間もない中華人民共和国の国力を強く海外要人にアピールしようとしたのである。

次に、日本人の政治家（自由党）の山口喜久一郎とその他の政治家の感想をみてみよう。1954年9月29日から10月某日に、山口は与野党含め25名と随行員3名で戦後初の国会議員団の公式訪中を行った。その目的は、日本人戦犯および残留日本人の帰還問題の交渉にあった。山口自身は当日体調を悪くし官庁ダムの視察を行っていないが、視察団の他の議員からの感想について以下のように述べている。

病気のために、永定河上流の官庁ダム現場へは行けなかつたが、日本の佐久間ダムの建築工事にくらべれば物の数ではないらしい。しかし機械力をあまり用いず、人力だけで、幅員四百四十メートル、高さ四十五メートルの長堰堤を延人員八百万人で、短期間につくりあげたということは、確かに称賛にあたいすると見学してきた人たちの感嘆であつた。その昔、秦の始皇帝が人力を徴発して、万里の長城を築いたこの国では、いまなお人間の労力一本で、巨大なダムをつくっている。人海戦術でいく大建設。これは、経済的採算を度外視する権力のはなれわざであつて、中国のような地大物博の国でだけ可能なのである⁽⁸⁵⁾。

山口は他の日本人議員の感想を聞き、建築工事を人海戦術を用い短期間で完成させた中国共産党と、長城を建築した古代中国の秦の国力についてイメージを重ね、人民共和国の国力について感嘆している。このように官庁ダムは、洪水防止や都市水利という役割以上

に、国内外に向けた建国初期の毛沢東による社会主義国家建設の開始を告げる巨大なモニュメントとして建造されたことが確認できる。

ただし、感嘆すると同時に山口は官庁ダム建設工事の粗雑さについても以下のように記している。

この工事場で、訪客に書き入れてもらう備え付けの感想記入簿には、……わが党の参議院議員石川栄一君は「土でつくった堰堤は危険なしとは保証されない。今後十分な管理と水源地の治山治水を考慮してダムを守ること。放水路をもう一本予備的に設けるよう考慮すること。年々歳々堆積する土砂の量を正確に調査し、植林とあいまって、上流に渓流ダムを多数急造すること。……そうしなければ、堆積する土砂のために堰堤が突破され、大洪水となる危険がある」と率直な意見を記したそうだ⁽⁸⁶⁾。

石川は、堆積する土砂の問題を指摘し、この巨大建築の継続的使用に疑問を呈した⁽⁸⁷⁾。こうした官庁ダム建設への否定的意見については、中国国内でも1956年に水力発電推進派の李銳⁽⁸⁸⁾が以下のように述べている。

今年1月の全国水利会議では傅作義部長が、水利部が過去に洪水のみを防止し、総合利用を重視しない傾向があったと報告の中で話した。皆知っている官庁ダムはこの問題について一つの教訓を与えていて、即ち、ダムの設計から工事開始まで全く発電と結びつけて考えられてはいなかったもので、工事が終了した後に発電所を建設し、多くの不合理さと投資の浪費を生み出した⁽⁸⁹⁾。

官庁ダムの建設では、民国期以降に洪水防止を第1の目的とされ、人民共和国建国後も治水を第1に重視する点が受け継がれた。そして反腐败、反浪費の三反運動の下、共産党の強い指導下で建設が急がれたが、李銳は、そうした過程で水力発電を含む利水面における工事の不合理さと浪費があったことを指摘している。また、李銳は地質調査についても以下のように述べている。

官庁ダム工事が始まった時、地質工作も行われていなかった。ダム建設地域の地質調査は、水力発電所が建設された時に補って行ったもので、ダムの堤体及び基礎地盤からの漏水情況やダム建設地右岸の基礎岩盤標高について全く調べていない。水力発電所はすで作動しているが、ダムの貯水位が正常な高さに達せず、堤体下流面で

は陥没と比較的深刻な漏水現象が発生している。今まさに緊急の防御措置を取っているとある。官庁ダムの教訓は、ダム建設地域の水文地質調査が十分なされていなかったことである⁽⁹⁰⁾。

ここで李鋭は、官庁ダム建設時における地質調査の不十分さという技術上の問題点を指摘している。李鋭は官庁ダム建設時に水電総局に配置され、水利部に対して洪水吐を水力発電の引水道にできることを進言した。しかし、水利部はその進言を頑なに断ったので、水電総局はダムの左岸で地質調査を行い新しく洪水吐を開き水力発電所を建設したという。さらに水電総局は発電の際ダムの底の漏水を心配し、ダム建設地の地質調査も行った。他方、水利部は主に洪水防止をダム建設の目的としたため、ダムの底の漏水には関心がなかった。この李葆華など水利部の洪水防止か李鋭など水電総局の水力発電への利用かをめぐる両者の対立は、その後ダム建設をめぐる顕在化したという⁽⁹¹⁾。こうした議論から、官庁ダムという巨大水利建築は、必ずしも永定河の治水と利水のみを目的として建設されたわけではなく三反運動を背景とした水利事業と首都建設における毛沢東の国家指導者像の醸成に用いられた建造物としての側面を強く持っていたといえよう。

IV 十三陵ダムと国家指導者像の転換

官庁ダムの建設後、1954年9月16日に北京市都市計画委員会が作成した「北京市の改築と拡張計画草案の要点」では、首都としての人口増加と工業化の発展の中、依然として北京の水不足が取り上げられていた。ここでは、その改善方法として「地下水のほか、官庁ダムの蓄水を十分利用しなければならない、……潮白河上流のふさわしい地域にダムを修建し、潮白河の水を北京に引き入れる」と新しいダムの建設も提案されている⁽⁹²⁾。

十三陵ダムの建設は、北運河の上流域における洪水を防ぐため、もともと第3次5カ年計画での工事が予定されていた。その建設予定地は、北運河へとつながる温榆河の支流の一つで、北から明十三陵地区へと流れこむ東沙河が華北平原へ出る手前の地点、蟒山と漢包山の峡谷の入り口に位置する東山口村付近であった【「北京河川図」参照】⁽⁹³⁾。しかし1957年の農田水利建設運動の影響のため、十三陵ダムの建設予定は早まったのである。

中共中央は1957年9月24日に「この冬から来春にかけて農地の水利建設と堆肥運動の大規模な展開に関する決定」を出し、「我が国の田畑の水利条件の下、小型を主とし中型を補として、必要かつ可能な条件のもと、大型のプロジェクトの水利建設を行う」という方針を打ち出した⁽⁹⁴⁾。この方針のもと、全国各地で農田水利建設が盛んになり、十三陵ダムの

建設も北京における中型ダムの建設計画として提案されることになったのである。

十三陵ダム設計計画は、1957年12月26日に北京市市政工程設計院によって1958年6月末を完成予定として提出され、1958年1月4日に北京市委員会により批准された。同年1月12日には十三陵ダム修建総指揮部が設立され、1月21日に工事が始められた⁽⁹⁵⁾。当初の建設工事では、総指揮部のみが設置され、総指揮を北京市委員会農村工作部部長趙凡⁽⁹⁶⁾が担当し、副指揮に北京市上下水道工程局局長賀翼張⁽⁹⁷⁾と昌平区委員会書記張俊士が当たった。指揮部に設置された設計処では、市政設計院が設計を担当し、そこには水利部の北京観測設計院の2人の技術者が加わった。また工事実施には、行政からの人員と技術員が30人、工事の労働力として昌平県の農民3、4千人ほどが当たったという⁽⁹⁸⁾。

しかし、工事の進捗が大幅に遅れたことから、同年4月30日に北京市委員会は國務院、北京軍区、鉄道兵団、水利部等との間で会議を開き、建設工事における問題点を討論し改善策を決定した。その内容は、第一に建設現場に総指揮部を設置し、総指揮を北京軍区副参謀長の羅文坊、政治委員を趙凡が担当し、この2人を新たに設置する党委員会の委員とすること、第二に総指揮部に新たに政治部を設置し、現場の政治思想工作を任せること、第三に建設現場のすべての工作は、総指揮部が統一して指導することである⁽⁹⁹⁾。

この決定に従い北京市委員会が工事を直接指導できるよう十三陵ダム党委員会が設置され、その改組後の名簿は5月5日に趙凡ら総指揮部の委員から北京市委員会へ提示された。そこでは、書記に趙凡（総指揮部政治委員）、残り3人の副書記には羅文坊⁽¹⁰⁰⁾（総指揮部総指揮）、六十九軍政治部主任の曹中南⁽¹⁰¹⁾（総指揮部政治部主任）、中共昌平区委書記の張俊士（総指揮部副総指揮）が担当することになった。つまり、北京市の軍および農村工作部により構成される建設現場の総指揮部と十三陵ダム党委員会が新たに設置され、その指揮のもとで政治思想工作を加えたすべての建設工事の指導の統一化が図られたのである。そして工事の指導体制が北京市委員会の下に統一化されたことで、現場労働者の動員対象が、付近の農民だけでなく、北京の都市幹部や大学等教育機関の多くの教員や学生に切り替わっていった⁽¹⁰²⁾。建設工事に政治思想工作を伴う十三陵ダム建設現場は、北京市委員会にとって、都市住民、特に幹部や教員、学生ら普段農業に従事しない人々に対する労働学習の場として認識されていたのである。

さらに十三陵ダムでの労働対象は、毛沢東をはじめとする中国共産党の領袖へも拡大する。その背景には、5月25日の第8回全国大会第2回会議において農工業の躍進を目指す「社会主義の総路線」の方針決定があった。同日の会議後、毛沢東をはじめ劉少奇、周恩来、朱徳、鄧小平らと他の中央政治局委員らは、十三陵ダムの建設現場へ赴き肉体労働に参加し⁽¹⁰³⁾、その様子は5月26日の『人民日報』で紹介された。これによれば毛沢東の様子

は以下のように報じられた。

毛沢東ら指導者達は午後1時に、中南海懐仁堂に集合し、それぞれ草帽をかぶり、粗末な布の衣服で、先の丸い布靴を履き、一般的な労働者の身なりをしていた。3時20分に建設現場へ到着し、毛沢東はまずダム東墩台でダムの全景を眺めた。建設現場では、毛主席が視察の休憩時にダム指導部に頼まれ「十三陵水庫」という5文字の題詞を書き、その後に劉少奇、周恩来、朱徳もみなダム工事に対して題詞を書いた。その後、毛主席と党中央の指導者たちは、大衆に幾重にも囲まれた。この時、毛主席と彭真と一緒にシャベルでダムの建設現場の土をすくった【写真2参照】。毛沢東らは夕方6時40分には建設現場を出発し、約3時間半の滞在であったという⁽¹⁰⁴⁾。

この毛沢東の労働する姿を撮影した写真は、5月26日の『人民日報』の上記内容とともに掲載され、大躍進政策と北京の建設のために労働する国家指導者としての毛沢東の姿が



写真2 「毛沢東主席十三陵ダム工事で土をすくう」(撮影：新華社記者侯波)⁽¹⁰⁵⁾

映し出されている。記事では、この毛沢東の労働活動について、建設現場の人々の意見も以下のように紹介された。

毛主席がシャベルを離すと、余秉森という解放軍の兵士が、すぐに自分の服でこのシャベルを包み上げた。彼は感激して以下のように言った。「このシャベルを見ると、我々は毛主席を思い出す。こうすると、私たちの仕事への情熱はより大きくなるでしょう」ある一人の農業合作社の社員は興奮して涙を流し記者に以下のように言った。「昔の皇帝は私たちのお金を搾取して、人々に十三陵で彼のために墓を修築させた。今日の共産党の指導者は、我々のために十三陵でダムを修築し、食糧を提供し人民の生活を改善してくれる。毛沢東、彼はあんなに忙しいのに来て、私たちと一緒にダムを修築してくれた。これは我々にどんなに大きな励みと力を与えるだろう。」⁽¹⁰⁶⁾

まさにこの余秉森の感想こそが、毛沢東が企図した大衆の行動であろう。十三陵ダムでの毛沢東の労働する姿は、大衆のみならず、領袖を含めた全中国の人々に対して労働を推奨する大躍進運動の号令であった。と同時に建国初期における水利事業を指導する国家指導者としての毛沢東像は、大躍進期における大衆とともに労働を行う国家指導者像へと転換されたのである。

では、この十三陵ダムにおける毛沢東の労働活動は、北京の人々の動員にどのような影響を与えたのだろうか。6月28日に十三陵ダム党委員会は彭真へ以下のような報告をしている。

国家機関の幹部と大学生を労働へ参加させることについては、同意しない者もいた。その理由としては、国家機関は調整して幹部を下放し、大学生は授業に出席する必要から運動に参加することに制限が伴われるからである。しかし、彼らは整風運動の偉大な成果を無視し、大衆の政治的情熱を無視している。従って彼らには誤りがある。

このように当初は、北京の国家機関や教育機関から動員について反論が出されていたのである。しかし、毛沢東ら国家指導者達が建設工事に参加してからは、以下の変化があったことが述べられる。

十三陵ダムでの労働は、北京の各機関や学校での整風の第四段階の重要な授業である。特に毛主席と全体中央委員が建設現場に来て労働に参加してからは、別の日に国

務院各部長や副部長も来て一週間の労働に参加した。これら一連の義務労働への参加は、工事や学習に対する意見に影響を与え、（筆者注：参加に）反対する者はいなくなった⁽¹⁰⁷⁾。

毛沢東ら国家指導者達の十三陵ダムでの労働参加が、北京の幹部の労働動員に対して効果があったことが報告された。また現場で毛沢東に随行していた総指揮部の趙凡も毛沢東の現場での労働について以下のように回想する。

毛主席など党と国家の指導者が率先して労働を行ったことは、北京市内の各業種の人々を非常に励ました。……彼らは「党中央や毛沢東主席が私たちに手本を示してくれたので、我々は必ず後について水利建設のために力を捧げなければならない」と言っていた。

趙凡も毛沢東の現場での労働が工事参加者の士気を高めたことを伝えている。また、毛沢東の題詞「十三陵水庫」や劉少奇、周恩来、朱徳の題詞は、新たに建造された記念碑の全面に刻まれた⁽¹⁰⁸⁾。記念碑の建造と毛沢東ら国家指導者の題詞は、十三陵ダムを大躍進による国家事業のモニュメントに仕立てあげたのである。

北京市委員会による工事の統一指揮と大規模な労働動員によって、6月11日には外堰の主な工事が完成した。十三陵ダムの建設は、中国共産党創立記念日にあたる7月1日に開催予定の落成記念大会に間に合わされた⁽¹⁰⁹⁾。十三陵ダム落成典礼大会では、彭真が十三陵ダムの建設について「首都の人民が社会主義建設事業においてまた偉大な勝利を納めた」とし、また「首都社会主義建設の大躍進の中で重要な指標である」と述べ、北京市民の大躍進における労働の成果として語っている⁽¹¹⁰⁾。

さらに、この落成典礼大会は、中央新聞記録電影制片廠によって「十三陵水庫落成式典」という短編フィルムとして撮影され、7月2日の夜に北京市街で観衆に公開された⁽¹¹¹⁾。また、7月には田漢によって執筆された十三陵ダムの建設過程を描いた舞台劇「十三陵水庫暢想曲」が中国青年技術劇院で演じられた⁽¹¹²⁾。このように十三陵ダムの建設は、映像化や舞台化され、首都北京の建設と大躍進における行動目標として北京の人々に宣伝されたのである。

十三陵ダムの建設と都市住民の労働動員について、大躍進期の毛沢東はどのように考えていたのだろうか。毛沢東は8月17日の北戴河会議の「幹部が労働に参加する問題」において以下のように語っている。

我々は幹部や職位に関わらず、老人と病人を除き、労働に参加できる者は皆参加しなければならない。……十三陵ダムが建設された。多くの者がダムの建設に行き数日労働を行った。毎年労働を1か月、1年を4期に分けて工業、農業、商業のどれでも良いので労働と仕事を合わせて、皆にこのようにさせてはどうか。皆が労働をしているのに、幹部が労働しないというのはいけない。

ここで毛沢東は十三陵ダム建設における大衆の労働を例に、幹部の労働参加を提起している。また8月30日に毛沢東が人民公社の組織の軍事化について話した際に、幹部の労働参加について以下のように述べている。

幹部の労働参加については、一つの決議を書いた。老人と病人以外で、中央の委員は毎年一か月、その他の幹部はさらに多く行う。……文官幹部は、毎年少なくとも一か月労働を行う。十三陵ダムを建築した時、多くの部長はみな労働に参加した。1年で農業を学び、2年で工業を学び、繰り返して学ぶと両方の能力を身に着けることができる⁽¹¹³⁾。

このように十三陵ダムの幹部の労働参加を例に、大躍進における幹部の労働を説いたのである。

実際には、十三陵ダムで労働参加をした人々は、機関幹部や都市住民だけではなかった。8月19日に十三陵ダム修建機関指揮部から出された報告書では、1958年2月3日から6月30日までの間に、中央国家機関（民主党派と人民団体）、中共中央直屬機関と北京市機関から358単位、8万7,186人が機関労働隊として義務労働に参加したとする。その人々は、政治的、階級的には総理、部長、一般幹部、工勤人員、各民主党派人士などであり、民族的には漢族、満族、モンゴル族、回族、チベット族、朝鮮族、カザフ族、ウイグル族など各民族が含まれる。職業は、教師、技術者、作家、高級知識分子などであり、宗教的にはイスラム教徒、キリスト教徒、僧、道士などであった⁽¹¹⁴⁾。また労働の内容は、雑草の除去、道路の補修、資材の準備、砂、土、石などの運搬、ダムの補修、堤体の上や監査路の修築など約50あまりの種類があった⁽¹¹⁵⁾。このように十三陵ダムの建設には、あらゆる階級、民族、職業、宗教を代表する人々が集められ労働に参加したのであり、これはほぼ中国全土における人々の属性を網羅したのである。毛沢東にとって十三陵ダム建設は、まさに「我々は幹部や職位に関わらず、老人と病人を除き、労働に参加できる者は皆参加しなければならない」を体現し、大躍進政策を全国に普及させるのに恰好のモデルであった。

では、十三陵ダムは、官庁ダム建設でみられたように対外的にはどのように宣伝されたのであろうか。『人民日報』で確認できるのは、ポーランド政府代表団やルーマニア、ドイツ民主共和国、アルバニア労働党などの東側諸国の代表が、近くの明十三陵と八達嶺の長城を見学した際に、十三陵ダムの建設現場において大衆の労働参加の様子を視察したことが報じられている⁽¹¹⁶⁾。だが、十三陵ダムは官庁ダムと比較するとそれほど大きくない中型のダムであったため、訪問団の中に長城や明十三陵の遺跡に匹敵するほどの感想はみられない。

また、李鋭の回想では、十三陵ダム建設における技術面の問題について、水利部が全く地質状況について検討していなかったため、十三陵ダムは水を貯え続けることができないものであったと指摘している。ここでも、電力供給などをも目的とする総合利用型のダムを志向する李鋭と洪水防止のみを目的とする水利部とが開発方針をめぐって完全に対立したのである⁽¹¹⁷⁾。

十三陵ダムという巨大水利建築は、北京への水源確保という役割も担っていたが、それ以上に大躍進政策が進行する中、北京の都市住民の労働と管理の場として利用され、政治的記念碑としての性格を色濃く持つものであった。それは1958年7月1日の中国共産党創立記念日のために6月末完成を目指して急ぎ建設されたことから明らかである。

おわりに

大躍進期の1960年に黄河の三門峡ダムが完成する。建国初期から1950年代を通して行ってきた黄河や長江そして淮河での毛沢東の治水事業は、自然を克服し大衆を守る伝統的な国家指導者像を大衆に想起させた。他方、都市インフラとしての官庁ダムや十三陵ダムの建設は、毛沢東の都市構想に基づく首都建設に深く関わっていた。北京を「消費都市」から「生産都市」へ改造する、すなわち伝統的な都市から工業的都市へ改造するために、新たな首都建設と都市管理が必要であった。

本稿での考察から、毛沢東と巨大水利建築との関係は、官庁ダムと十三陵ダムでそれぞれ異なるものであった。歴代政権が挑んだ永定河の問題を根本から解決しようとした官庁ダムの建設は、国民政府期から継続する首都および京津地域を洪水から防衛する一大プロジェクトであった。これを成功に導いた功労とそれに対する称賛は、三反運動が推進されるなか民国期の水利専門家ではなく、新しい国家指導者の毛沢東に帰せられた。官庁ダムは、洪水防止や北京の工業化のための水源の確保という水利施設としての役割とともに、毛沢東が首都建設と中国初の大型ダム建設事業の指導者であるというイメージを大衆に付

与するモニュメントとしての役割も果たした。毛沢東は完成後のダムではなく、完成前の建設地を視察し、建設労働者を指導する様子を写真や報道で宣伝し、建国初期における首都建設と水利指導者としてのイメージを大衆に植え付けたのである。また、巨大建築としての官庁ダムは、対内的には完成後に毛沢東によって題詞が授られたことによって、水利指導者としての毛沢東像を半永久的に残すモニュメントとなり、対外的には国際的信頼回復のための国力誇示の象徴として用いられたのである。

十三陵ダムと毛沢東の関係からは、より一層毛沢東の政治性が浮かびあがる。毛沢東は、ダムの建設作業に参加することにより、都市住民による首都建設、さらには国家全体で押し進められる大躍進の象徴となった。大躍進運動の中で、首都建設という名の下に、都市住民を動員して労働に従事させるには、毛沢東という国家指導者が自ら労働に参加すること以上に説得力のあるメッセージはなかった。水利建設で毛沢東が労働する写真は、北京の都市住民だけでなく、国家全体の人々への大躍進の開始を告げるメッセージであった。毛沢東の国家指導者像は、大衆を指導するだけでなく、大衆と共に労働するというイメージへと転換した。そして、完成した十三陵ダムは大躍進へ大衆を導くモニュメントとなったのである。

1959年には、北京において建国十周年記念として天安門広場が拡張され人民大会堂や革命歴史博物館など「十大建築」が建設された。これらは北京の都市空間を伝統都市から社会主義空間へと変貌させ、大衆を社会主義へ、さらには毛沢東への個人崇拜へと導く巨大建築群として北京の伝統中軸線上にそびえ立った⁽¹¹⁸⁾。北京の伝統的建築を代表する長城と故宮は、毛沢東による巨大ダムと天安門広場の社会主義建築群にとって代わられた。ただし、毛沢東と巨大建築との関係においてソ連と決定的に異なっていたのは、ソ連では建設作業に囚人が用いられたが、北京では都市住民の動員が重視されたことである⁽¹¹⁹⁾。毛沢東は、巨大建築物の建設を通して都市住民の動員を行うことで、都市住民の管理と社会主義化を同時に行い、巨大建築群は動員の指標となるモニュメントとなったのである。

本稿で扱った巨大水利建築は、治水及び利水の役割のみならず建国初期と大躍進期においてそれぞれ異なる背景をもつ政治性を帯びたが、毛沢東の意図は一貫してその建設過程における大衆との関係構築にあった。毛沢東は、完成した巨大建築そのものではなく、その建設過程における大衆との関係を重視し、大衆からの崇拜を集め自らの政治運動に利用した。そのような背景の中、1950年代に多くの水利建築が建設されたが、三門峽ダムのように数年して水利上の用途を果たせない巨大水利建築も建設されることになったのである⁽¹²⁰⁾。

註

- (1) 北京建設史書編輯委員会編『建国以来の北京城市建设』内部出版、1986年、23頁。
- (2) インフラとは第一義的には物的な巨大な構築物を意味し、一般的には都市の基幹的施設を指すが、より広範な内容を含んだ社会資本を指す場合もある。伊藤毅「序：都市インフラと伝統都市」吉田伸之・伊藤毅『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年、5-7頁。
- (3) 北京建設史書編輯委員会編『建国以来の北京城市建设資料 第4巻、水利・能源・通信』北京建設史書編輯委員会、1989年、15-16頁。
- (4) 北京水利志編輯委員会編『北京水利志稿』第3巻、中国水利水電出版社、1989年、182-183頁。
- (5) 前掲『建国以来の北京城市建设資料』155-156頁。
- (6) 大躍進期には、1958年から1961年までの間に1958年1月の十三陵ダムの建設工事を皮切りとして、同年に响潭ダム、怀柔ダム、唐指山ダム、珠窩ダム、漢石橋ダム、密雲ダム、崇青ダム、南庄ダム、1959年には海子ダム、丁家洼ダム、北台上ダム、天開ダム、王家園ダム、桃峪口ダム、沙峪口ダム、銀冶嶺ダム、1960年には南彩ダムなど数十基のダム建設工事が北京周囲の山間区域で開始された。呉文涛『北京水利史』人民出版社、2013年、214-215頁。
- (7) 1950年の洪水では、淮河支流も含めた河南、皖北、蘇北に及ぶ流域で4,350万畝が被害を受け、特に皖北では6割の土地が被害を受けた。三河閘は1953年7月25日に完成した。「淮河最大水閘三河閘工程紹介」『人民日報』1953年8月12日第2版。
- (8) 「水利部部长傅作義視察荆江分洪工程 代表毛主席授旗慰問广大員工」『人民日報』1952年5月29日第1版。
- (9) 「荆江分洪工程全部完工 全体員工向毛主席報捷」『人民日報』1952年6月23日第1版。
- (10) 「做好治理黄河的第一工程」『人民日報』1955年10月16日第5版。
- (11) ダム建設史では川井悟「中国長江三峡ダム建設計画の立案過程についての一考察」(『プール学院大学研究紀要』第46号、2006年)、林秀光「中国建国初期の水力発電部門と三峡ダム計画」、(『法学研究』第89号、2016年)がある。なお、清代の永定河治水については黨武彦『清代經濟政策史の研究』(汲古書院、2011年)、民国期については森田明「民国6年(1917)の京畿水災と善後河工対策—「河工討論會議事録」を中心に」(『中国研究月報』第72巻6号、2018年)が詳しい。
- (12) 「毛沢東は現代の禹である。自然の風景とナショナリズムの混在は、党が『山をひれ伏させ、河を屈服させる』ために社会の再編成を指令し承認するという要求を強烈に正当化させた。」David A. Pietz, *The Yellow River; The Problem of Water in Modern China*, Harvard University Press, 2015, p. 8.
- (13) 伊藤はインフラの持つ両義性について「インフラには都市生活の不可視の下部構造的な側面と、その巨大性から不可避的に露わになる物的なモニュメント性の両義的な存在」とする。前掲「序：都市インフラと伝統都市」9頁。
- (14) デイヤン・スジック『巨大建築という欲望—権力者と建築家の20世紀』紀伊国屋書店、2007年。
- (15) スジックは、これらの建築物が、皇帝権力の象徴であった紫禁城からの伝統中軸線上に建設されたことで北京の伝統的都市空間が破壊されたとする。また、建設時には大躍進政策

- への求心力の醸成とそれによる国家と党を賛美する目的があったこと、さらには「衛星国家」中国へのスターリンの影響があったことを指摘する。その影響とは、スターリンによるモスクワの「赤い門」や17世紀のスハリョフ塔の取り壊しなどを取り上げ、伝統都市の景観破壊であったとする。ただし、都市建築については、スターリンの「記念碑嗜好」の特性を挙げるとともに、その様式については、西洋建築を踏まえて独自の建築的前衛を生み出したスターリンと、中国独自の建築文化を否定した毛沢東との差異に言及する。同上、157-152頁。
- (16) 王軍（『城記』三聯書店、2003年）や徐蘇斌（『中国の都市・建築と日本』東京大学出版会、2009年）は、城壁の撤去や人民大会堂の建設など都市建築について、議論を検討している。
- (17) Roderick Macfarquhar, “*The Origins of The cultural Revolution: 2 The Great Leap Forward 1958–1960*”, Columbia University Press, 1983, pp. 75–76 · 241, Pietz 2015, p. 196.
- (18) 本稿では、ダムの機能性ではなくダム建設が持つ政治的意味を考察の対象とするため、建国初期のダムの事例として官庁ダムを、大躍進期におけるダムの事例としては、規模・供給水量とも最大の密雲ダムではなく、大躍進時期に最初に建設された十三陵ダムを取り上げる。
- (19) 北京水利志編輯委員会編『北京水利志稿』第1巻、中国水利水電出版社、1987年、11頁。
- (20) 1970年に屈家店以北に新たに永定新河が開かれ永定河の流れを直接渤海に入れたため、北運河には合流しなくなった。北京市官庁水庫管理处編『官庁水庫50年』出版社不明、2004年、79頁。
- (21) 前掲『北京水利志稿』第1巻、155頁。
- (22) 前掲『清代經濟政策史の研究』、249–301頁。
- (23) 前掲「民国6年（1917）の京畿水災と善後河工対策—「河工討論会議事録」を中心に」。なお、順直水利委員会技術部部長のイギリス人技師ルースは、順直河道改善決議案の中で官庁における貯水池やダムの建設に言及していた。熊希齡撰『順直河道改善建議案』順直水利委員会、1928年、17頁。
- (24) 華北水利委員会『永定河治本計劃』華北水利委員会、1933年、巻一10、154頁。
- (25) 前掲『北京水利志稿』第3巻、120–122頁。
- (26) 中央人民政府水利部は1949年10月に成立し、11月1日に初代水利部部長に傅作義が任命された。1954年には中華人民共和国水利部へと名称が変更され、1958年2月に水利部と電力工業部が合併し、水利電力部が設立される。中華人民共和国水利部弁公庁編『新中国水利（水電）系統組織沿革1949–2000年』水利水電出版社、2003年、9頁。
- (27) 前掲『北京水利志稿』第1巻、30頁。
- (28) 『毛沢東選集』第4巻、人民出版社、1953年、1316–1317頁。
- (29) 同上、1318頁。
- (30) 同上、1316–1317頁。
- (31) 「把消費城市變成生產都市」『人民日報』1949年3月17日第1版。
- (32) 彭真「恢復与發展生產是城市工作的中心任務」（1949年4月16日）、中共北京市委党史研究室編『北京市重要文獻選編1948.12～1949』北京市檔案館、2001年、392–393頁。
- (33) 聶榮臻「紀念北京解放1周年」『人民日報』1950年1月31日第1版。
- (34) 梁思成は晩年に彭真から伝えられた「過去の消費都市である北京を生産都市に改造する」という毛沢東からの指示について理解できなかったと述べている。前掲『城記』67–68頁。

- (35) 北京市档案馆編『北京档案史料—西山永定河生態環境治理』新華出版社、2018年、61-77頁。
- (36) 「確定水利建設方針与任務、水利聯席會議閉幕決加強防洪排水開渠灌溉達到大量發展工農業生產」『人民日報』1949年11月19日第2版、「各解放区水利聯席會議總結報告（轉載）水利部部長傅作義在全国水利聯席會議上報告」『新黄河』1950年、39-45頁。
- (37) 施嘉場、1902年生まれ、福建福州の人。1923年清華学校を卒業し1927年アメリカコーネル大学土木工程理科修士を修める。民国期は清華大学教授、土木系主任、工学院院長を歴任し、人民共和国期も清華大学教授、水利系水文水電站教研組主任、中国水利發電工程学会第一回理事長などを歴任する。『中国人名大詞典』当代人物卷、上海辞書出版社、1992年、1566頁。
- (38) 「中央人民政府水利部 召開水利聯席會議」『人民日報』1949年11月9日第1版、「代發刊詞——一九四九年11月14日各解放区水利聯席會議開幕辭」（「中央人民政府水利部 召開水利聯席會議」）『人民水利』創刊号、1950年8月20日。
- (39) 李葆華、1909年生まれ、直隸樂亭の人。1925年中国共産主義青年団に入党し1931年東京高等師範学校を卒業し、同年中国共産党に入党する。中共中央河北局党校副校長、中共北平市委第二副書記、人民共和国期には水利部副部長、党組書記、中共中央華東局第三書記、中国人民銀行行長を歴任する。前掲『中国人名大詞典』830頁。
- (40) 邢肇棠、1894年生まれ、甘肅通渭の人。1918年甘肅省陸軍測量学校を卒業し、1945年中国共産党に入党する。河北人民政府委員兼寧夏省人民政府副主席や人民共和国期に寧夏省人民政府主席、河南省副省長を歴任する。同上、368頁。
- (41) 徐覚非、1904年生まれ、湖北應城の人。金陵大学農業專修科を卒業し、1927年中国共産党に入党する。中原臨時人民政府農林部副部長や人民共和国期には湖北省農林庁庁長、北京農業機械化学院長を歴任する。同上、1708頁。
- (42) 王化雲、1908年生まれ、直隸館陶の人。1935年北京大学法律系を卒業し、1938年中国共産党に入党する。冀魯豫辺区黄河水利委員会主任や人民共和国期に水利部副部長兼黄河水利委員会主任を歴任し、長年黄河水利に従事する。同上、103頁。
- (43) 徐正、1891年生まれ、直隸武清の人。1920年北洋大学土木系を卒業し、国民政府華北水利委員会技師、南京運河整理工程局局長をつとめる。1946年中国共産党統治下で華北人民政府委員兼水利委員会副主任を務め、人民共和国期には水利部計画委員会副主任、河北省水利庁庁長を歴任する。同上、1684-1685頁。
- (44) 張含英、1900年生まれ。1924年イリノイ大学土木系学士、コーネル大学土木系修士号を取り、国民政府期に黄河水利委員会委員長、北洋大学校長、人民共和国期に黄河水利委員会顧問、中国水利学会第一回、第二回理事長を歴任する。1981年中国共産党に入党する。同上、1194頁。
- (45) 須愷、1900年生まれ、江蘇省無錫の人。1917年、南京河海工程専門学校を卒業し、1922年から23年にカリフォルニア大学灌漑系で学び、北京政府期に導淮委員会副技師長、国民政府期に水利部技監、人民共和国期に水利部計画司司長を歴任する。同上、1522頁。
- (46) 前掲「中央人民政府水利部 召開水利聯席會議」。
- (47) なお武上は、これら水利政策に携わる民国期の水利専門家達が属する中国の土木、工学分野において、アメリカ系エンジニアリングの影響力が無視できないものであったと指摘する。武上真理子「シヴィル・エンジニアリングの語と概念の翻訳—「市民の技術」とは何か」

石川禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年、234頁。

- (48) 「各解放区水利聯席會議上傳作義」、『人民日報』1949年11月9日第1版。
- (49) 共同綱領の第34条は、農林・牧畜業について述べており、その中で水利については「河川改修と洪水や干害の防止に注意をはらうべき」とされる。第35条は工業に関して、第36条は交通に関して説明され、そこでは水運の拡大に言及する「中国人民政治協商會議共同綱領」、『人民日報』1949年9月30日第2版。
- (50) この第35条と第36条について、傅作義は「農業でいえば洪水や干ばつ防止であり、灌漑用水路の設置については農業発展の主な保障であり、工業と交通については水力発電や河道の浚渫であり、港湾の修築については電力と輸送力の利便を与えることである」と述べた。前掲「各解放区水利聯席會議上傳作義」。
- (51) 傅作義は、毛沢東の革命闘争と農民の関係性について、「特に毛主席が言うには、中国革命闘争の基本形式は武装闘争であり、この武装闘争の性質は主に農民戦争であるので、過去の中国革命の過程では、中国の農民は実に計り知れないほどの貢献を行った」と説明している。同上。
- (52) 王同春、1851年生まれ、直隸邢台県の人。張謇の下で北京政府水利顧問を歴任する。顧頡剛「王同春開發河套記」『禹貢半月刊』第2巻第12期、1935年。
- (53) 李儀祉、1882年生まれ、陝西蒲城県の人。1909年ドイツのベルリン工科大学で土木を学ぶ。1915年南京河海工程専門学校で教鞭をとり、1928年華北水利委員会委員長、1931年中国水利工程学会会長、1933年黄河水利委員会委員長を歴任。徐友春主編『民国人物大辭典』増訂版第2版、華北人民出版社、2007年、554頁。
- (54) 前掲「各解放区水利聯席會議上傳作義」。
- (55) 「中央人民政府水利部李葆華副部長在十四日水利會議上關於水利建設方針和任務的報告」『人民日報』1949年11月18日第4版。
- (56) 前掲「各解放区水利聯席會議總結報告（転載）水利部部长傅作義在全国水利聯席會議上報告」39-45頁。
- (57) 「關於水利工作一九五零年的總結和一九五一年の方針与任務」、『人民日報』1951年2月17日第1版。
- (58) 泉谷はこの時期を朝鮮戦争の長期化を見込んだ戦時体制への転換点であるとし、「53年からの大規模建設のため」に政策策定・実施が図られ、都市部では大衆運動が展開され激化していったことを指摘する。泉谷陽子『中国建国初期の政治と経済』御茶ノ水書房、2007年、22頁。
- (59) 「中共中央政治局拡大会議決議要点」(1951年2月18日)、中共中央文献研究室編『建国以来重要文献選編』第2冊、中央文献出版社、1992年、39-43頁。
- (60) 「中共中央關於実行精兵簡政、増産節約、反对貪污、反对浪費和反对官僚主義的決定」(1951年12月1日)、前掲『建国以来重要文献選編』第2冊、471-485頁。
- (61) 金野純『中国社会と大衆動員』御茶ノ水書房、2008年、103-104頁。
- (62) 「中央轉發中央財政部、水利部、輕工業部及人民銀行各党組關於反貧污、反浪費、反官僚主義的報告（1951年12月）」、前掲『中国五十年代中期的政治運動資料庫：從土地改革到公私合營（1949-1956）』。
- (63) 「三千多員工日日夜夜辛勤勞動、官庁水庫工程已完成一部分、現正擴大施工圍進行大規模

- 的春季工程』『人民日報』1952年3月27日第2版。
- (64) 高鏡瑩、1901年生まれ、天津の人。1922年にアメリカのミシガン大学で工学学士と測地測量学で修士号を修めた。国民政府期には華北水利委員会で工程組主任や海河整理委員会工処処長、1936年に永定河官庁ダム工程処副処長、戦後は華北水利委員会が改組された華北水利工程総局の副局長となる。1949年人民共和国成立後、華北水利工程局総工程師となり、海河の洪水対策に乗り出し、1951年末に官庁ダムの工事が始まると、官庁ダム工程局局長となった。中国科学技術協会編『中国科学技術專家略伝』工程技術編・土木建築1、中国科学技術出版社、1994年、129-136頁。
- (65) 劉煥文「永定河官庁水庫工程進展緩慢浪費很大」『人民日報』1953年2月5日第2版。
- (66) 原文では『北京人民日報』と記載されている。「糾正拖延浪費現象保証水庫工程如期攔蓄洪水、永定河官庁水庫工地展開反官僚主義運動」『人民日報』1953年3月13日第1版。
- (67) 同上。
- (68) 郝執齋、1914年生まれ、直隸安新の人。北洋工学院を卒業し、1943年中国共産党へ入党する。華中水利局局長、華北水利委員会委員兼秘書長など水利行政に携わる。人民共和国期には水利部弁公庁副主任、水利電力部弁公庁副主任、副部長を歴任する。前掲『中国人名大詞典』1443頁。
- (69) 李子光、1902年生まれ、直隸薊州の人。1926年中国共産党に入党する。中共中央冀察熱遼分局秘書長、人民共和国期には中共河北省委秘書長、農村工作部部长、河北省副省長を歴任する。同上、744頁。
- (70) 「永定河官庁水庫広大的員工積極迎接施工」『人民日報』1953年4月8日第1版。
- (71) 高鏡瑩は1951年末の工事開始の頃に工程局局長となり、1953年に技師長となる。その後は、1954年に水利部観測設計局副局長、1955年に水利部技術委員会主任兼技術司司長、1958年に水利電力部技術委員会副主任を歴任する。前掲『中国科学技術專家略伝』131頁。
- (72) 「官庁水庫伏汎前工程如期完成、永定河兩岸人民从此減免洪水災害」『人民日報』1953年7月2日第1版。
- (73) 「『官庁水庫』説明書（中国電影發行公司宣伝処資料、宣伝材料・157）」『電影宣伝資料合訂本』第1冊、中国電影發行公司宣伝処、1954年。
- (74) 「官庁水庫全体員工向毛沢東主席報捷」『人民日報』1953年7月2日第1版。
- (75) 中華人民共和国水利部宣伝処編『官庁水庫（画冊）』水利出版社、1957年。
- (76) 毛沢東の視察日については、『毛沢東年譜（1949-1976）』第2巻（中共中央文献研究室編、中央文献出版社、2013年、232頁）では4月11日とし、前掲『官庁水庫50年』（5・6・15頁）では4月12日とする。本稿では前者に依拠し4月11日とする。
- (77) 侯波、1924年生まれ、山西夏県の人。1938年中国共産党に入党する。1942年徐肖冰と結婚し、戦後は東北撮影制片廠で撮影科長、1949年から59年まで中南海撮影科科長を務める。毛沢東の写真は400点余りあり、代表作に1949年「開国大典」、1952年「毛沢東視察黄河」、1956年「毛沢東暢遊長江」がある。郝執齋『官庁水庫』（中華全国科学技術普及協会、1954年）、肖冰口述『帶翅膀的摄影机—侯波、徐肖冰口述回憶録』（北京大学出版社、1999年）を参照。
- (78) 「官庁水庫竣工慶祝大会隆重举行」『人民日報』1954年5月15日第1版。
- (79) 米川正夫、1891年生まれ、大正から昭和にかけてのロシア文学者。東京外国語学校（現東京外国語大学）を卒業する。陸軍大学校教授を務めた。『日本人名大辞典』講談社、2001

- 年、2017頁。
- (80) 淡徳三郎、1901年生まれ、昭和時代の社会評論家であり、学生運動のリーダーとして京都学連事件で検挙される。戦後ソ連に抑留され、1948年に帰国する。同上、1209頁。大山郁夫、1880年生まれ、大正・昭和時代の社会運動家であり、政治家である。1940年に労働農民党委員長に就任する。戦前は衆議院議員、戦後は参議院議員を務め、1951年に国際スターリン平和賞を受賞する。同上、1960頁。
- (81) 「国際友人参観永定河官庁水庫工程」『人民日報』1953年10月4日第2版。
- (82) その他にも、1953年10月4日に北朝鮮、マレーシア、ドイツ、インド、パキスタン、インドネシア、タイ等の青年代表団94人が北京を訪問した際に、八達嶺の長城と官庁ダムを参観している。また、1953年10月13日には、北朝鮮、ベトナム、ミャンマー、インド、インドネシアの華僑代表も官庁ダムの視察に訪れた。「各国青年代表、参観官庁水庫和長城」『人民日報』1953年10月5日第1版。「政協全国委員会招待帰国観光的華僑代表、朝鮮、越南、緬甸、印度和印尼華僑帰国代表参観官庁水庫」『人民日報』1953年10月14日第1版。
- (83) 山口喜久一郎、1897年生まれ、1942年に衆議院議員となり、第3次吉田内閣の国務相、第2次岸内閣の行政管理庁長官などをつとめ、1965年に衆議院議長となる。前掲『日本人名大辞典』1960頁。
- (84) 米川は官庁ダムの視察後、天津、南京、上海、杭州、広州を訪問し10月27日に帰国している。米川正夫「永定河ダムと長城」『ソヴェート紀行』角川書店、1954年、200-204・227-229頁。
- (85) 「人力だけで造られた永定河ダム」『保守党から見た新中国』読売新聞社、1955年、24頁。
- (86) 同上、24-25頁。
- (87) 石川は、1950年に建設委員会委員であった際に、利根川水害について土砂の問題を提起している。「第16部第8回国会参議院建設委員会第三号」1950年7月22日。石川栄一、1889年生まれ、1950年参議院に当選し、1955年自由党国会対策副委員長、30年特別国会建設常任委員長を歴任する。『昭和人名事典Ⅱ』第2巻（東日本編）、日本図書センター、1989年、49頁。
- (88) 李鋭、1917年生まれ、湖南平江の人。1937年中国共産党に入党する。人民共和国期には中共湖南省委宣伝部代部長、燃料工業部水電総局局長、電力工業部部長助理、水利電力部、電力工業部副部長などを歴任し、主に水利電力部門に携わる。前掲『中国人名大詞典』734頁。
- (89) 李鋭「關於水力資源普查與河流綜合利用問題」(『水力発電』1956年第3期掲載) 李鋭『李鋭文集』第10巻、中国社会教育出版社、2009年、92頁。
- (90) 李鋭「加強水電地質勘察工作」(『水力発電』1956年第6期掲載) 前掲『李鋭文集』10巻、119頁。
- (91) 李鋭「対歴史負責到底：回億三峡工程上馬的始末」(『当代中国研究』1999年第3期掲載)、前掲『李鋭文集』10巻、365-366頁。李鋭『李鋭口述往事』大山文化出版社、2013年、338頁。
- (92) その後、潮白河の上流には密雲ダムが建設される。「改建与扞建北京市規劃草案の要点」北京建設史書編輯委員会編『建国以来的北京城市建设資料第1巻、城市規劃』北京建設史書編輯委員会、1987年、176頁。
- (93) 1957年制定の『海河流域規則（草案）』で計画された。前掲『北京水利志稿』第3巻、

- 181-183頁。なお、この地域は1956年に北京市に編入され昌平区となる。
- (94) 「關於今冬明春大規模地興修農田水利和積肥運動的決定」(一九五七年9月24日) 前掲『建国以来重要文献選編』第2冊、567-572頁。
- (95) 史義軍、徐連英「1958年中央領導參加十三陵水庫建設記事」『党的文献』2008年第5期、「1958年北京十三陵水庫修建落成史料選」北京市檔案館編『北京檔案史料2003・1』新華出版社、2003年、83頁。
- (96) 趙凡、1916年生まれ、河南鄆陵の人。1937年中国共産党に入党する。晋察冀第一地委組織部部长、北平市平民工委書記、人民共和国期には中共北京市委農村工作部部长、市委書記処書記、北京市副市长、農林部副部长、農墾部副部长を歴任する。前掲『中国人名大詞典』1482頁。
- (97) 賀翼張、1908年生まれ、江西永新の人。1932年中国共産党に入党する。中国工農紅軍へ加わり長征に参加する。晋綏軍区第三分区政治部主任、人民共和国期には中共北京市宣武区委書記、北京市建材局、市政工程局局长を歴任する。同上、1588頁。
- (98) 前掲『北京水利志稿』第3卷、186頁。
- (99) 「關於十三陵水庫工程問題會議紀要(1958年4月30日)」前掲『北京檔案史料2003,1』84-85頁。
- (100) 羅文坊、1916年生まれ、江西吉安の人。1929年年中国工農紅軍へ参加し、同年中国共産主義青年団に入団し、1931年に中国共産党へ入党する。中央ソヴェト区反圍掃戦と長征に参加する。1937年延安抗大で学び、晋綏軍区科長、人民共和国期には北京公安総隊総隊長、公安部隊師長、北京軍区副參謀長、水電部副部长を歴任する。前掲『中国人名大詞典』1322頁。
- (101) 曹中南、1914年生まれ、直隸景県の人。1933年中国共産党に入党する。晋綏冀豫軍区旅政治部主任、人民共和国期には北京軍区幹部部部长、山西省軍区、天津警備区政治委員を歴任する。同上、1809頁。
- (102) 「中共北京市委給十三陵水庫工地全体同志們的祝賀信(1958年5月25日)」前掲『北京檔案史料2003.1』87-88頁。
- (103) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜(1949-1976)』第3卷』中央文献出版社、2013年、359頁。
- (104) 「毛主席和全体中委參加労働」『人民日報』1958年5月26日、第1版。
- (105) 「毛沢東、彭真在北京十三陵水庫工地參加労働」(1958) 李琦、梁平波、宗文龍主編『路：徐肖冰侯波攝影作品集』浙江人民美術出版社、1988年、74頁。
- (106) 毛沢東の他に劉少奇、周恩来、朱德、董必武、彭德懷、賀龍、李先念、ウランフ、張聞天、陸定一、陳伯達、康生、薄一波が汗を流して土をすくったと報道されている。また、林彪は午前中に現場につき労働を始め、呉玉章、徐特立、謝覺哉は古稀を過ぎているが、青年と同じくらいやる気に満ちていたと報じられた。前掲「毛主席和全体中委參加労働」
- (107) 「十三陵水庫党委会關於修建中打破常規和保守思想向彭真同志的匯報」(1958年6月28日) 前掲『北京檔案史料2003・1』88-90頁。
- (108) 趙凡「回憶毛主席等中央領導參加十三陵水庫建設」『中国農墾』2003年12期、12頁。
- (109) 前掲「十三陵水庫党委会關於修建中打破常規和保守思想向彭真同志的匯報」88-89頁。
- (110) 「彭真在十三陵水庫落成典禮大会上的講話」(1958年6月29日) 前掲『北京檔案史料2003・1』98-100頁。

- (111) 映画内容は3つの部分に分かれ、①ダムの最後の工程で10万の労働大軍が大いに奮い立ち、人民の偉大な力をみせる、②ダムの紹介とダムの風景描写、③式典大会の記録と勝利し狂喜して熱烈な場面、である「首都今天上映“十三陵ダム落成典礼”」『人民日報』1958年7月2日第7版。
- (112) 「為“十三陵水庫暢想曲”大声喝彩!」、『人民日報』1958年7月16日第8版、田漢著『田漢全集・第6巻話劇』花山文芸出版社、2000年。
- (113) 「8月30日午前講話」（「毛沢東在北戴河會議上の講話（記録稿）1958.8.17-8.30」）前掲宋永毅主編『中国大躍進一大飢荒データベース』。
- (114) 「機関工作人員参加十三陵水庫義務労働的総結報告」前掲『北京档案史料2003・1』100-101頁。
- (115) その背景には「4月に周恩来が建設現場を視察して以降、機関労働隊は指導を統一し、会議を開き関係する労働組織の決定を行い軍事化の管理を行った。また、労働鍛錬と支援工程を重視する認識に統一したため、労働戦闘力が増大した」ことが指摘された。同上、100-102頁。
- (116) 1958年3月22日、ピョートル・ヤロシェヴィチを代表とするポーランド政府代表団が建設現場を参観し、義務労働を行う5万人ほどのダム建設者たちの熱烈な歓迎を受けた（「波蘭貴賓参観十三陵水庫工地」『人民日報』1958年3月23日第2版）。1958年4月4日にはルーマニア政府ギブ・ストイカ主席と政府代表団が明十三陵と長城（「羅馬尼亞政府代表団参観十三陵水庫工地」『人民日報』1958年4月5日第4版）、1959年5月7日にヨハネス・ディーグマン率いるドイツ民主共和国人民議院代表団が明十三陵、居庸関、八達嶺の長城（「徳議院代表団由烏蘭巴托返京狄克曼主席参観十三陵水庫」『人民日報』1959年5月8日第4版）、1959年5月11日アルバニア労働党代表団が明十三陵と八達嶺（「阿爾巴尼亞労働党代表団在京参観十三陵水庫等地」『人民日報』1959年5月12日第4版）、1960年6月7日にアルバニア人民議会議長団主席ハジ・レシが明十三陵と故宮、民族文化宮（「哈奇・列希主席参観十三陵ダム」『人民日報』1960年6月7日第2版）、1960年10月20日にアルバニア中国友好協会主席と代表団が八達嶺を訪問した（「凱萊齊副主席参観十三陵水庫」『人民日報』1960年10月20日第4版）。
- (117) 前掲『李銳口述往事』338頁。
- (118) 十大建築のうち、人民大会堂、中国革命博物館と中国歴史博物館、民族文化宮、民族飯店、北京駅、華僑大廈の6つの建築物は旧市街にある。前掲『城記』265-266頁。
- (119) モスクワへの水供給のためのモスクワ・ヴォルガ運河の建設の際の労働者の多くが囚人労働であった可能性が指摘される。下斗米伸夫『スターリンと都市モスクワ：1931-1934年』岩波書店、1994年、240-243頁。
- (120) 黄河中流に建設された三門峽ダムは大躍進のさなか1960年に完成するが、ダムの貯水後に予想を超える早さで砂泥の堆積が進み、1年で三門峽から潼関に至る溪谷が土砂で埋まり、西安や関中盆地に被害を及ぼす可能性が出てきた。そのため1965-67年と1970-74年に改修工事が行われたが、その規模は計画を大きく下回るようになった。上田信『大河失調一直面する環境リスク』（叢書中国的問題群9）岩波書店、2009年、39-40頁。